

記念特集に序して

大野 達之助

木代先生はここ十年間にわたって、わが駒沢大学の歴史学科ならびに大学院人文科学研究科日本史学専攻の主任教授として懇篤な学問指導に当られ、その間公選の初代文学部長として四年間、文学部全教員の信望を荷って大学及び学部改革に尽瘁されてきました。そのような激務に携っていましたが、昨春定年を迎えられ、残念ながらご退職になりました。ここに多年にわたって学恩を受ける私達が相はかり、大学院学生の参加をえて、ささやかながら記念の特集を編んで先生に献げることになりました。

先生は別掲の略年譜にありますように、明治三十一年（一八九八）島根県能義郡母里村で生誕され、日本海海戦の風雲急を告げる同三十八年四月に母里村尋常小学校に入学、島根県師範学校を経て大正十一年（一九二二）東京高等師範学校に進まれた。ご卒業後やがて助教から教授へ昇任、昭和二十四年新制の東京教育大学文学部教授、同二十八年同大学院文学研究科日本史学専攻の授業を担当、その間御専門の日本文化史を一貫して講義なされた。そして同三十六年東京教育大学を定年御退官になって専修大学へ移られ、翌年多年の研究成果の一端を「平城京の都市生活についての研究」の一篇にまとめられ、学位請求論文として東京文科大学に提出して文学博士の学位を受けられたのであった。

さて駒沢大学との関係は夙に太平洋戦争勃発の翌昭和十七年から始まり、当時は専門部歴史科に非常勤講師として日本文化史の講義を担当されていた。その後敗戦を迎えて中絶状態になっていたが、同四十一年本学に日本史学専攻の大学院が設置さ

れるとともに先生をお迎えして教授陣を強化したのである。丁度この年の十二月から学園紛争が起り、暴力の嵐が吹き荒れたが、この紛争を機に長年にわたる因襲改革の氣運が高まり、四十三年五月に学内刷新委員会が発足した。委員会は五つの分科会に分れ、それぞれ委員長以下の委員が選出されたが、先生は第二分科会の「大学等機構委員会」の委員長に選出されて、精力的な作業に取り組むことになった。仄聞するところによると先生は終始指導的立場をとられ、組織作りの構想を推進されたお蔭で、今日見るような学部教授会がそれぞれ独立し、各学部の調整機関として全学教授会が設置され、その他教員人事委員会、一般教育運営委員会などが成立したのである。

こうして発足した新体制の下で四十四年四月に初代文学部長に選出され、全教員の信望を荷って四十四年から四十八年まで二期在職されることになった。文学部ははじめ国文・英米・地理・歴史・社会の五学科の外に、外国語・保健体育、それに短大をも含んだ雑然たる寄合世帯で、統合運営が困難であった。教授会なども一部教員の長広舌が続いて、夜の七時、八時になることもしばしばであった。そういう混然たる雰囲気の中にあっても先生は実に忍耐強く司会に当られたが、次第に学部内の不協和音が高まってきたので、先生は当時の山内教務部長と改革案を練られ、ようやく成案を得て四十五年四月から外国語・保健体育・短大を文学部から分離し、文学部の構成は国文科以下の五学科と、一般教育を担当する文化学・自然科学の二教室に教職課程が加って八つのブロックにまとまったのである。それからさらに八ブロック間の人事をはじめ諸問題を調整する機関として、主任連絡会議が設けられることになった。こうして文学部は今日まで一体化した融合組織としてその機能を果してきているが、これは一重に先生の卓抜した識見と御努力の賜物であり、さらには前近代的な本学を明るい近代的なすがたに生れかわらせて今日の隆盛に導いた裏には、先生の献身的な努力が与って大いに力があつたといつても過言ではないと思う。

さて先生が去られた今、私達はもはや先生の穩厚なお人柄に接して、目のあたり御指導を受けることができなくなり、大きな炬火を失った思でまことに寂寥の感に堪えません。先生は生来きわめて御壮健であります、この上ともに御加餐になり、本学の歴史学科のため私達後輩を末永く御指導下されんことを心からお願ひいたす次第であります。